

【国語】

実践事例：小学校2年生 / 実施機関：日野市教育委員会（東京都）

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

- ・長文をみただけで学習意欲が減退する。
- ・すらすら読めない。（ことに平仮名続きの箇所、言葉のまとまりを捉えるのが難しい）
- ・読み飛ばしや勝手読みがある。
- ・漢字の読み書きが苦手。
- ・所定時間内に板書を写したり、意見や感想を書いたりすることができない。
- ・難語句だけでなく、日常的に使う言葉の意味を知らなかったり、異なる意味に取り違えて覚えていたりすることがある。
- ・指示語の理解が苦手。
- ・文章から場面、状況、時間経過を想像することが苦手。
- ・情景描写や行動から心情を理解することが苦手。
- ・学習用語（場面、登場人物、中心人物、段落、問いと答え、要点等）がなかなか定着しない等。

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）

その他

(2) 子供の困難さ

見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと

コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること

落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること

学習（計算、推論等）すること その他

- ・片づけが苦手、学習用具を整えられない。
- ・集中できる時間が短く、課題以外のことに関心が移ってしまうことが度々ある。
- ・書字が、ゆっくりで、2年生1学期の時点では、書く言葉を唱えながら書いていた。また、字が思い出せない時には、50音表で確認していた。
- ・物語や説明文などの長文の課題は、みただけで読む意欲を無くしてしまう。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

- ・入学当初より落ち着きがなく、1学期中に、学級担任、スクールカウンセラー、特別支援コーディネーター等で丁寧な観察を行った。

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

- ・ 1学期の様子から、市の巡回相談を要請し、2学期に市の巡回相談にて、児童観察及び、保護者面談を実施。巡回相談員（明星大学小貫悟教授）より、発達検査及び医療機関受診を勧めてもらう。
- ・ 1年生3学期、市の発達・教育支援センターにて発達・心理検査を受検。
- ・ 1年生3学期、在籍校の言語障害通級指導学級にて、発音や理解語彙、コミュニケーションの状態等についての検査実施。
- ・ 2年生1学期から、言語障害通級指導学級での週2回（1回1時間）の指導開始。
- ・ 2年生夏季休業中、医療機関にてADHDの確定診断を受ける。この時にLD、ASDの傾向があることも同時に指摘されている。

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・ 授業に集中できない。
- ・ 文章をスラスラ読めない。
- ・ 書くこと全般を嫌がる。
- ・ 物語や説明文等の長文の内容を理解することが難しい。

(2) つまずいている背景・原因

- ・ 集中時間の短さや、注意の転動による指示や教示の聞き漏らし。
- ・ 平仮名、カタカナ（表音文字）の自動化（瞬時に読み書きできること）の未定着。
- ・ ワーキングメモリーの容量が小さく、指示や教示内容、読んだ内容を忘れてしまう。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

●担任が学級で行った指導や工夫

全体指導での工夫

- ・ 児童のつまずきを予想した授業作り。（指導内容の焦点化、視覚化、共有化）

授業内での工夫

- ・ 教員の個別の支援がすぐにできる座席。

授業内での個への指導

- ・ 集中が続くような個別の声掛けや、指示や教示の再確認。
- ・ 言語障害通級指導学級での補充指導を生かし、本児が活躍できる授業内での場の設定。

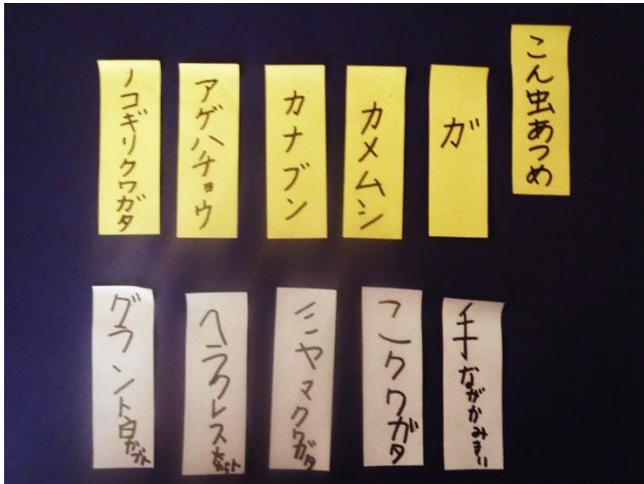
(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

●言語障害通級指導学級で行った指導（2年生1学期より通級による指導開始）

○楽しんでできる活動を通して平仮名、カタカナの読み書きの定着指導。

- ・ 本児の好きな虫の図鑑や絵本を読む。
- ・ 虫の名前集め。
- ・ 虫の名前を当てるクイズ作り。

- ・付箋紙を使ったしりとり。
- ・しりとりで出たものの名前を使った短文作り。
- ・カルタ取り等



本児が大好きな昆虫の名前を使った平仮名、カタカナの練習。

手元に平仮名、カタカナの50音表を置いて行った。

言葉の分類の学習を兼ねたカタカナの学習



○在籍学級で行う物語、説明文の予習的補充指導。

- ・学習の見通しをもって、集中して話を聞くために。
 - ⇒長文は、本人の希望を確認した上で、あらすじ（説明文は、あらすじの全部。物語では、結末の直前まで。）を学習の始めに伝える。
- ・音読の負担を軽減するために。
 - ⇒最後まで集中して長文を読めるように、説明文は段落ごとの教材文、物語は場面ごとの教材文を使って学習をする。
- ・学習用語の定着を図るために。
 - ⇒「段落」「場面」「はじめ・中・終わり」「問い」「答え」「まとめ」等の用語を物語、説明文の学習の度に確認をする。
- ・語彙を増やすために。
 - ⇒単元に出てくる難語句だけでなく、耳慣れない言葉や、本児が知らないと予想さ

れる語句を取り上げて、他の言葉で説明させたり、短文を作らせたりする。また、単元の学習を理解する上で、予備知識としてもっていた方がよい事柄について取り上げ、話題にする。

物語 「スイミー」の場面毎の内容を読み取る指導



集中が続くように

- * 表の線を引く。
 - * 場面の数字を書く。
 - * 挿絵を切って貼る。
- 等の作業を適時入れた。

内容理解の指導

- * 場面毎の教材文を句点で交代しながら音読する。
 - * 場面と絵のマッチング。
 - * 場面毎の内容を「スイミー」で終わる一文で考えて書く。
- これらを3時間で行った。

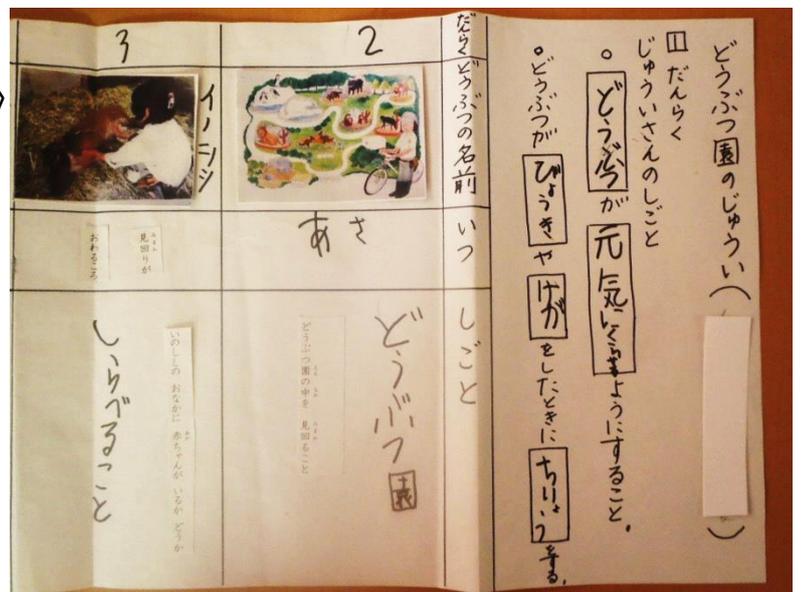
「書く」ことの負担感を減らすために

- * 内容理解において大事な部分のみ穴埋めで書く。
- * 書く意欲が減退した時には、教材文を切り取って貼る。

内容理解の指導

- * 段落毎短冊状にした教材文の音読。
- * 段落と絵のマッチング
- * 「いつ」「しごと」等の記入。
- * 完成した表を見て「はじめ・中・おわり」を考える。

物語 「どうぶつ園のじゅうい」



(4) (3) の効果・評価 (児童生徒の様子や変容および授業の評価)

- ・ 2年生2学期後半には、平仮名、カタカナの読み書きが瞬時にできるようになった。それに伴い、書くことへの抵抗感が薄れ、書字が速くなり、字形も整ってきた。
- ・ 場面や段落毎の教材文を使うことにより、長文であっても最後まで、音読できるようになった。

- ・ 物語は場面毎、説明文は段落毎に題名を考えさせる指導を継続することによって、格段に内容を理解する力が付いてきた。
- ・ 在籍学級の授業で活躍できる場面が増え、授業に集中して参加できるようになってきた。
- ・ 「国語の学習が楽しい」と言うようになり、本児自身が、読解力の向上を実感するようになった。
- ・ 自校通級の利点を生かし、在籍学級担任と通級による指導担当が、頻繁に情報交換することができ、児童理解が深まった。
- ・ 在籍学級担任、通級による指導担当が、共同で教材研究や授業研究をすることにより、双方の授業力を向上させることができた。

【数学】

実践事例：中学校全学年 / 実施機関：日野市教育委員会（東京都）

●教科における学習上の予想されるつまづくポイント

四則計算において教科書で示す例題を用い演習を行った場合、特定の数値が使われていると発達障害の可能性のある多くの生徒が計算ミスを起こす傾向がある。さらに文字式を学習する際、文字という抽象的な概念が理解できず文字式の加法・減法が円滑に行えないことが予想される。また、図形の対称性においては、教員があらかじめ補助線を示さないと発達障害の可能性のある多くの生徒が回答に至らないという傾向がみられる。

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）
 その他

(2) 子供の困難さ

見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
 コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
 落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
 学習（計算、推論等）すること その他

学習…四則計算の際、使用する数値によって計算ミスが出やすい。

概念…文字を使用した計算という概念が理解できない。

大きさや空間認知が弱いため図形の概念が伝わりにくい。

2. 教科における学習上のつまづきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

1 学年生徒においては、4月～5月

2 学年生徒においては、1年次の定期テスト結果及び評定

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

CRTの検査結果

定期テスト及び1年次の授業観察

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまづきの内容

四則計算ならびに図形の対称性の問題で理解が得られないところがある。

文字の使用による混乱。

(2) つまづいている背景・原因

数値や図形の大きさや位置関係など認知力に欠ける。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

指導内容や教材教具の工夫により定着を図る。

①正負の計算に対し理解を促すことを優先し、2桁の計算を行う際は、繰り上がりのない問題(1の位を4以内)で演算させる、数直線を有効に活用するなどの指導法を用いた。

②文字という抽象的な概念を具体的なものに置き換えて指導した。(例えば $2x + 3x = 5x$ については、「りんご2個とりんご3個、合わせてりんご5個」⇒「2りんご+3りんご=5りんご」として指導した。)

文字式の『 x 』を具体的な物に置き換えることにより、基本的な文字式の加法・減法が行えるようにした。なお、この指導法は、それ以降の方程式、連立方程式にもつながるものである。

③図形の対称性に関する問題において理解を促すために、ICTを活用し空間図形として画面上で図を展開させ理解を促した。

(ii) 個別指導について(取り出し指導、通級による指導との連携など)

特別支援学級の教員間においても、通常の学級で指導効果が得られている指導方法を共有し指導に当たる。

(4) (3) の効果・評価(児童生徒の様子や変容および授業の評価)

決められた数値による四則計算において誤答が減少した。

文字を具体物に置き換えることによって、イメージを持つことができその後の文字を含んだ式についても意欲を持って取り組むようになった。

図形の対称性において空間認知ができるようになったこと、当該生徒のみならず、基本的な内容が未習熟の生徒に関しても評価測定において正答率が高まった。また、授業内において挙手や発言も活発になり授業が円滑に進むように変容した。